

浅川満彦. 2005. 齧歯類と線虫による宿主 - 寄生体関係の動物地理. (増田隆一, 阿部 永 編著) 動物地理の自然史—生物多様性の謎を解く, 北海道大学図書刊行会, 札幌: 111-125.

矢島 稔. 2003. 謎とき昆虫ノート. pp.285, 日本放送出版協会, 東京.



『動物園を魅力的にする方法 - 展示デザインにおける 12 のルール』

Wolfgang Salzert 著 富澤奏子 訳

2018年3月 文永堂出版 発行

定価 (本体 5,000 円 + 税)

浅川満彦 (酪農学園大学獣医学群)

本書は、来園者が動物園（以下、園）にて、より楽しく動物を観察してもらうための施設デザインを解説した実践書で、まず、園の施設責任者は必読である。参考にされた施設は国外（主に欧州の）園であったが、海獣や海鳥の展示施設も扱われていたので、間違いなく水族館にも示唆的内容を含む。

ところで、本学会の主要構成メンバーは獣医学、動物看護学、保全生態学、あるいは畜産学など動物それ自体に知的好奇心を抱く人々である。したがって、「園に限らず、社会は分業体制で成立している。経営に直結する営みはその専門のものが考えること。我々は動物と動物に直に接する人間のことだけを考えていれば良い。この学会はそのための科学を担うのであって、そもそも、こういった本を紹介すること自体も如何なものか」として、本書を開くことすら忌避するかも知れない。

ここで簡単な思考実験をしてみよう。幾多の激しい競争の末、幼少からの夢であった園に就職をした。日々、獣医師として、あるいは飼育担当者として休日返上で奮戦した。そのようなある昼休みに、同僚から、2, 3 年後に閉園になるのではと耳打ちされる。理由は経営不振。そう言えば、入った時に比べ、客の入りが少なくなった気がするが…。日本社会では概して転職が難しく、リクルート活動自体も相当なエネルギーを要する。本来、動物の健康に費やすべき力がこのような心配で消耗されるので、有能で熱いスタッフであればある程、口惜しい思いをすることになる。

このような危機的経営状態にさせないための効果的手段は予防であろう（疾病対策と同じ）。すなわち、どのようにすれば、よ

りお客さん楽しんでもらえるのが至上命題となる。そのような対策を講じる際、本書はとても有益なものとなる。本書で提案されるものは、動物の見せ方に関わってくるので、原資（経営や経済の話なのであえてドライに）である動物の健康状態に悪影響を与えては、運営継続に支障が生ずるのでタブーである。往々にして施設デザインの専門家は動物のことは門外漢なのであるが、本書の著者は園動物医学の専門家であり、両者の視点からの優れたオファーとなっている。そもそも、本書で扱う見せ方には、お金のかかる大きな施設のことばかりではない。たとえば、解説（標識や教材、いわゆるモグモグタイムなどの活動）の意義や配置についても包含をしている。概して、教育と診療とが分業化されていない日本の多くの園に勤務する「何でも屋の」獣医師あるいは飼育担当者には重要な虎の巻となる。

それでも「専門外なので、本書の内容なんて判り難いのでは」と心配している方へ。大丈夫。本書では良い例と悪い例が（主に大陸欧州の豊富な）写真により、並列・対峙させている。前園では各写真のキャプションに名前が明示されているので、欧州に渡航した際、それら実例を確かめに現地訪問できる。しかし、後の方の事例の園は、取り上げられた具体名が明らかにされない。あまり名誉なことではないので仕方がないが、（本当にダメなのか、現状は改変されたのかななどを）確かめることは不可能である。むしろ、参考になるのはこのような失敗例であると評者は感ずるのだが…。ついでに、もう一つ個人的なことで申し訳ないが、評者は近代動物園の始祖とされるロンドン動物園で野生動物医学専門職修士課程を過ごした。しかし、この園が良い例にまったく出ていないのが、大変、気になった（チェスター含む英国および大陸欧州の名だたる園の名は出ているのだが…。）いや待てよ、本書で指摘した宜しくないポイント、結構該当していたような気がするの、仕方がないのかな。なお、副題で示された 12 のルールだけでもここで列挙をしたかったが、やめておこう。本書第 2 章で詳述されているので、これらだけでもご自身で確かめて欲しい。